投稿論文

吾妻新と沼正三によるズボン・スラックス論争

――一九五〇年代『奇譚クラブ』における日本的サディズムの萌芽

河原梓水

キーワード　サディズム、吾妻新、沼正三、村上信彦、奇譚クラブ

はじめに

現在、被虐・加虐的な性の遊戯として、あるいは「異常な」性犯罪の動機となる心理として知られるサディズム／マゾヒズムは、古今東西に普遍的に存在し、誰の心にも多少は存在する、いわば「人間の本能」として理解されることを常としてきた。しかしながら、アブノーマルな性の遊戯としてのサディズム／マゾヒズムの現在のあり方は、例えばそれが盛んなヨーロッパと日本の間で比較しても大きな差異がある。坂井はまなは、日本のサディズム／マゾヒズム＝SM文化は、ヨーロッパと比較してより信頼関係や精神性を重視する傾向があることを指摘する（坂井2009）。この傾向は、二〇一一年および一四～一五年にかけて、日本国内のSMクラブに勤務する女性たちに対し筆者が行ったインタビュー調査の結果とも整合的である。信頼関係・愛情関係にない人間関係における行為は「真のSMではない」として忌避され、これらを排除する形で日本的な「SM」というカテゴリーは成立していると言える。このような、現在の日本で我々が見聞きできるSMという文化は、決して人類に共通する本能ではなく、歴史的に成立したものである。さすればこのような日本独特のSM文化は、いつ、どのように成立したのだろうか。

かつて筆者は、その起点を、一九五〇年代、アブノーマル性風俗雑誌『奇譚クラブ』と、その誌上で展開された吾妻新というサディストのサディズム論に見、これが日本的なSM

文化の基礎をなしていることを論じた[*1]（河原 2015）。『奇譚クラブ』はマニアに絶大な支持を受け、SM文化形成の場として機能した雑誌であり、誌上の議論は日本的SM文化の起点として重要な意義を持つ[*2]。その後、吾妻の正体が服装史・女性史研究家・小説家である村上信彦であること、彼のサディズム論は自身の女性解放論と対になっており、民主的平等論者の立場と矛盾しないことを論証した（同前）。本稿では一九五三年、『奇譚クラブ』誌上で起こったズボンをめぐる論争に焦点を当て、これを読み解くことで、吾妻＝村上の女性論・服装論がいかにサディズム論に取り込まれ、日本的なサディズムを基礎づける理論となっていったのかを明らかにする。

1　雑誌『奇譚クラブ』とズボン・スラックス論争

1『奇譚クラブ』と吾妻新、沼正三

『奇譚クラブ』は、一九四七年一一月、大阪府堺に所在した曙書房から吉田稔を発行人として創刊された、いわゆるカストリ雑誌のひとつであった。三合（号）でつぶれるという悪質な粕取り焼酎に喩えられる通り、多くの雑誌が廃刊して消えていくなか、『奇譚クラブ』はアブノーマルな性癖に特化し、マニアに寄りそう内容と豪華な挿絵が絶大な人気を博し、幾度かの休刊を挟みながらも、一九七五年まで発行され続けた。澁澤龍彦、三島由紀夫、野坂昭如などの著名人も愛読したことで知られている。

『奇譚クラブ』は、しばしば誌上で読者が自身のアブノーマルな性癖に関する考察を発表したり、それを基に読者同士で意見交換を行ったりという相互行為が見られ、同好の士による同人誌的側面があった。大正期に一世を風靡したエログロ風味の読み物は戦後にも氾濫し、当初サディズムを取り上げる雑誌は多数存在した。また『奇譚クラブ』の成功を受け、類似雑誌が多く発行され、同様の相互交流が試行されたらしい[*3]。しかし、これらはいずれも定着することはなかった。『奇譚クラブ』のみが唯一の例外であった。当時の寄稿者であり、その後作家・緊縛師として活躍した濡木痴夢男（飯田豊一）は「『奇譚クラブ』とはマニアの目線になって、マニアの立場になってマニアの心になって編集された、いってみればアブノーマル趣味同人誌であった。この種の雑誌の出現は本邦初めてであり、ほかに同類はなかった」と述べている（濡木 2004: 24-25）。現在日本で用いられるサディズム、マゾヒズム、SMといった概念は、戦後の『奇譚クラブ』における読者間の議論を通じ、人々の思想の集積・洗練の結果、日本独特の文化として成立したと言える。

本稿で取り上げるズボン・スラックス論争の一方の当事者である沼正三（ぬましょうぞう）は、論争の三ヶ月前の一九五三年四月号に「神の酒（ネクタール）を手に入れる方法」を寄稿して以来、「あるマゾヒス

トの手帖から」（のちに「ある夢想家の手帖から」に改題）、「家畜人ヤプー」などを長く『奇譚クラブ』に連載した著名なマゾヒストである。「家畜人ヤプー」は戦後最大の奇書と呼ばれたマゾヒスト小説であり、一九七〇年に単行本として出版され、一大ブームとなった。

一方の当事者である吾妻新は、沼が同誌に登場する一ヶ月前、同年三月号に「サディズムの精髄――古川裕子氏の『囚衣』をよんで」を初寄稿、以後、およそ三年にわたりサディストの立場から活発に小説・評論を発表した人物である。沼と吾妻はほぼ同時期に『奇譚クラブ』に登場し、ほぼ毎号一篇以上の作品を発表し続け、またたく間に雑誌の看板作家となった。沼と比べて吾妻は現在全く無名の存在であるが、同時期の読者の投稿文には、「吾妻氏と沼氏を得られたのは奇クの最大の収穫[*4]」、「奇クの執筆陣に吾妻新、沼正三の両氏を迎えたことは正に双璧とも称すべきでしょう[*5]」といった文言が躍り、当時、吾妻が沼に匹敵する人気作家とみなされていたことは間違いない。沼と吾妻は初期の『奇譚クラブ』を支えた人物であり、またマゾヒズム、サディズムそれぞれを代表する者とみなされてもいた。ズボン・スラックス論争は、『奇譚クラブ』におけるマゾヒスト・サディストそれぞれの「総帥[*6]」による論争であったといえる。

＊1　サディズム、マゾヒズムという語自体は、一八九一年に刊行されたリヒャルト・フォン・クラフト＝エビング『性的精神病質』第六版（初版、一八八六年）にて初めて規定され、一九一三年に邦訳されて日本に輸入された（これ以前の邦訳である『色情狂篇』は原著第四版の邦訳で、いまだサディズム／マゾヒズムには触れられていない。『変態性欲心理』は原著第七版の邦訳〔斉藤 1999, 2006〕）。ただし、被虐・加虐行為から快楽を感ずる性的嗜好については、Binet（1887）が先駆的に触れ、マゾヒズムではなくpassivismeの語が提唱されるなど（Stefanowsky 1892）、必ずしもクラフト＝エビングひとりによって創始されたわけではなかった。

＊2　『奇譚クラブ』の重要性、画期性については、濡木痴夢男（2004, 2006）、飯田豊一（2013）、北原童夢・早乙女宏美（2013）等に詳しい。ただし、北原・早乙女（2013）は事実誤認が多く見られ、先行研究として用いることはできない。現代のSM愛好者が『奇譚クラブ』をどのように位置づけているかという資料として挙げるのみである。

＊3　『奇譚クラブ』の読者通信欄に当時の状況が記されている。

＊4　佐渡魔造「私評・一九五三年上半期のベスト・テン」『KK通信』第一一号（一九五三年八月）。『KK通信』は『奇譚クラブ』の購読者の一部に通信販売にて発行していた会誌。

＊5　福岡NO・一六〇四（読者通信）（『KK通信』第一一号）。

＊6　『KK通信』第一一号掲載の花尻公友「サディストとマゾヒスト」一〇頁に「サディズム側の総帥たる吾妻新氏」の記載がある。

2　ズボン・スラックス論争の経緯

この論争の発端は、一九五三年七月号に掲載された沼の「あるマゾヒストの手帖から（二）」第一五章、スラックスに対して、吾妻が異議を唱えたことに始まる。次の表は、論争のテクストを時系列に整理したものである。以下、番号でこれらのテクストを示す。

「あるマゾヒストの手帖から」は、博覧強記の沼が古今東西の文学・歴史・芸術などを、マゾヒスティックな観点から読み解くエッセイで、数年にわたって連載された。[*7] エッセイの内容は、未邦訳の海外文献の紹介・訳出が豊富に盛り込まれるなど、一介の大衆雑誌の記事の水準をはるかに超えていた。沼の正体については諸説あるが、相当の知識人であったことは疑いない。[*8] 発端である①は、中世ヨーロッパの版画に描かれた夫婦によるズボン争奪図から、ズボン着用が家庭内の権力の象徴であることを読み解き、戦後日本で一般的になりつつあった女性の「スラックス」文化をマゾヒスティックに解釈するものである。量としては一ページに満たない。

スラックスとは、アメリカから輸入された女性用ズボンを指し、現在想起される、男性用の背広と対になったズボンではない。そして、一九五三年時点において、スラックスは単なる女性の衣服というだけでなく、やや特殊な意味を持っていた。

戦後の女性の服装は、戦中のモンペ・活動衣の着用などを前提に一気に洋装に傾き、ズボンの着用も珍しいことではなくなった。中山千代によれば、男性権威の象徴であったズボンの着用は「女性服装のエポックであ」り、働く女性の服装として普及し始めていたという（中山2010）。なかでもアメリカから輸入された「スラックス」と呼ばれる女性用ズボンが、女性解放の機運とともに近代的女性のスタイルとして流行期を迎えていたという。スラックスは女性の社会的地位の変化と密接に関連して流行したものと当時からとらえられており、沼の①のエッセイもこれを前提として書かれている。後述するように、吾妻がズボンにこだわった理由もここにある。

吾妻と沼の論争の論点を端的に述べると、当時日本で流行していた女性の履物を、ズボンと呼ぶべきか、スラックスと呼ぶべきか、

表1

著者・タイトル	掲載号
① 沼正三「あるマゾヒストの手帖から(二)」第15章、スラックス	1953.07
② 吾妻新「女のズボンについて ── 沼正三氏に」	1953.08
③ 沼正三「再びスラックスについて ── 吾妻新氏に答える」	1953.10
④ 吾妻新「女のズボン・最終的回答 ── 沼正三氏に」	1953.11
⑤ 沼正三「吾妻新氏に最終的に答える」	1953.12

というものである。吾妻は強硬にズボンと主張し、沼はズボンでもよいが、スラックスも間違いではないという立場をとった。このため本論争は、編集部により「ズボン・スラックス論争」と呼ばれた。[*9] 一見すると、なぜこのような語句の違いについて論争が起きるのか不可解であるが、その背景には、吾妻＝村上の特異な女性論、服装論の存在がある。またこれらが融合した吾妻のサディズム論は、当時のマニアたちに多大な影響を与え、私見ではその後のＳＭ文化にも大きな影響を与えている。以下、論争における吾妻＝村上の主張を読み解き、その後のＳＭ文化、特にサディズムを規定した彼独自の思想を明らかにする。なお、論争では沼が吾妻に歩み寄り、スラックスの語をズボンに統一しているので、本報告でも、引用文以外ではズボンを用いる。

まずは論争の経緯を確認したい。吾妻は②において、スラックスはアメリカ文化の輸入であり、その語の使用はアメリカの流行に限定されるべき、流行を超えて女の服装の一部となった今日ではズボンと呼ぶべきだと主張する。そして、「女がズボンを穿くのを喜ぶのはマゾヒステイツクだという氏の意見について」（②：133）、「沼氏がどのように感ずるかは自由なのですが、それを一般化して、現代がマゾヒズムの世界だとか、女のズボンを喜ぶのはマゾヒステイツクだとか考えられると、非常に危険です」（②：134、傍点引用者）と沼を批判する。吾妻によれば、女性のズボン着用は、流行ではなく、ましてや男の真似でもない。ひとえに女性の地位が向上し男性への隷属状態から脱したことにより、従順さや弱さを象徴するスカートやキモノではなく、活動的で機能的なズボンが自然に選ばれるようになったからである。これは、「あまりにも歪められた従来の女らしさ」（②：133）からの回復であり、「女のズボンはキモノやスカートに比して、ずつとあたらしい美を表現してゐる」（②：134）として、ズボンの魅力はマゾヒズムとは無関係であると結論づける。

このような吾妻の批判に対して、沼は困惑した様子で応じている。応答として書かれた③では、「マゾヒストはおんなの地位が向上して自分よりも上になることを求めるのだから」、吾妻がズボン文化の定着を女性の地位向上に結びつけたことは「そのまま私の文への説明になる」（③：72）として、吾妻が何を問題視しているのか測りかねている。そして、ズボンがスカートよりも合理的・機能的だという吾妻の主張に異議を唱えたのち、「私は米国という国をマゾヒステイツク

＊7　連載タイトルは「沼正三の手帖」等、巻号により表記の揺れがある。

＊8　沼の正体については諸説あるが、近年、内藤三津子（2013）によって、裁判官であった倉田卓次である可能性がより高まった。

＊9　『奇譚クラブ』一九五三年一二号、一八七頁。

な国と見、つまり女尊男卑の女上位的要素の勝つた国と見、そして女がズボンを穿く風俗をその象徴と見得るといつたのである。いつたい氏は私の右の意見には反対され乍ら女のズボンが女の地位向上に基くことを主張される。私にはそこが理解できないのである」(③:73)として、「女尊男卑の国の象徴として女の地位の向上の結果獲得された風俗をあげることが危険であり、根本的に誤つていると云われるなら、その理由をもう少し伺いたい」(③:73-74)と述べる。

対する④において吾妻は、これ以上の議論は編集部および読者に迷惑がかかるとし、再び自説を要約する形で示すことで議論を打ち切った。ここで吾妻は沼の疑問に関して直接的に答えず、アメリカの婦人解放が遅れていることをもってアメリカが女尊男卑の国であることを否定し、さらに「女のズボンは女の解放と共に風俗化するが、女の解放はけつして男をマゾヒステイツクにしない。それをそう思うのは、氏が多くの男性と同様に、従来の不平等な男女関係を基礎において眺めているからだ」として、ズボンにマゾヒスティックな魅力を感じる沼の欲望をふたたび否定する。

沼はこの返答に怒りをあらわにして短く応答する。彼はあくまで吾妻の主張を、語句の定義の問題と受け止めている。⑤において彼は、吾妻が④において「デザイナーなどというものがいかに衣服に無知であるかを示している」として服飾デザイナーを激しくこきおろし、さらに吾妻が自らを、衣服研究を志して二五年の専門家であると称したことにふれ、「専門家の色眼鏡」と吾妻を揶揄する。吾妻の主張はあまりに専門家として細をうがちすぎており、サディストの立場に偏った主観的見方であるというのだ。自分はマゾヒストとして、そして常に性の問題、象徴としてズボンを論じているのであって、「チヤタレイ事件の控訴審はあの小説を猥褻文書と判決したが、私達は判事が法律の専門家なるの故を以て、その判決に服しはしないのである」[*10](⑤:187)と主張、サディストである吾妻の介入を拒否する。以上、両者の主張は平行線のままズボン・スラックス論争は終わった。

2　ズボンの意義
――吾妻新＝村上信彦の女性論・服装論から

沼正三が不審に感じているように、吾妻新の主張は、ズボンが女性の地位向上、活発性や自立性を象徴するという点で沼と一致している。にもかかわらず、吾妻はなぜズボンとスラックスについて、これほどまでに強い主張を行ったのだろうか。特に、女のズボンを喜ぶのはマゾヒストだという考えは「非常に危険」とまで言い切る点はかなり奇妙である。いったい誰にどのような危険があるというのだろうか。

吾妻のズボンへの強い興味は、まずは彼の性的関心に起因している。吾妻は『奇譚クラブ』において一貫してズボンの素晴らしさを主張し、連載小説などでズボンを着用した魅力

的な女性を描き続けた。したがってこの論争は個人的な好みの対立とみることも可能だが、しかしながら吾妻が女のズボンを賛美する背景には、彼が自ら「ライフワーク」と記した服装史研究と、それと密接な関連を持つ彼独自の女性論の存在がある。これらをふまえると、例えば一見ささいな問題にみえるスラックスとズボンの区別が、吾妻にとって決して看過し得ない重要な問題であったことがわかる。

1　吾妻新＝村上信彦の女性論

吾妻新の正体は既述の通り、服装史・女性史研究家、小説家の村上信彦（一九〇九〜八三年）である。村上は、女性史研究者として『女について――反女性論的考察』[*11]、『明治女性史』、服装史研究者として『服装の歴史』シリーズ、小説家として『音高く流れぬ』等々、多数の著作をあらわした。吾妻のテクストには、村上の経歴との一致や、著作にみえるエピソードとの一致、それも固有名の一致が多く見られ、両者が同一人物であることは確実である（河原 2016）。両者の同定の詳細は別稿にて論じたのでここでは触れず、同一人物だという前提のもと、論を進めたい。以下、迂遠な考察となるが村上の女性論を概観した上で、村上にとってズボンがいかなる意味をもっていたかを考察する。

村上信彦の最もよく知られた業績は、一九六九〜七二年にかけて刊行された『明治女性史』全四巻である。村上はこの大著のまえがきと、同時期に雑誌『思想』に発表した論文において、既存の女性史が解放史であったことを批判、新たに「庶民女性の全生活史」を提唱した。[*12] 上野千鶴子は「村上は、第一に女性史を『解放史』から解放し、第二に女性史を『階級史への従属』から解放した」として、村上がその後の女性史研究に与えた影響を高く評価する。さらに彼をフィリップ・アリエスに比肩して、その後隆盛した社会史や民衆史的視角の先駆者として位置づける（上野 2002: 63-65）。

村上の提唱した「生活史」は、確かにその外見においては社会史や民衆史とよく似ていたが、その初発の動機・目的は大きく異なっていた。[*13] ズボン・スラックス論争を遡ること六

＊10　チャタレイ事件とは、一九五一〜五七年、ローレンスの小説『チャタレイ夫人の恋人』をめぐって争われた裁判であり、露骨な性描写のある本小説の出版がわいせつ物頒布罪に当たるか否かが問われたもの。控訴審は⑤のおよそ一〇ヶ月前である一九五二年一二月に結審。

＊11　沼はなんと⑤において「氏をまたずとも、[…] 村上信彦が、以前からそういう議論をしている」として本書に言及している。村上のエッセイによれば、『女について』は全く売れなかったそうであるから、議論がこの後も続いていれば、貴重な読者に対して吾妻＝村上の態度も軟化していたかもしれない。

＊12　論争の経緯については、古庄ゆき子（1987）に主要論文がまとめられ、整理されている。

年、彼が一九四七年に興風館から刊行した『女について』における女性史への言及をみていきたい。

本書で村上は従来の女性史を、「女性の歴史から男の歴史に拮抗できるような業績を探しだすのは、研究の目的をほとんど理解していないやりかた」であり、「むしろ誤った自殺行為[*14]」だと批判する。「なぜなら彼らが発見できるのは、数においても高さにおいても男と比較にならないほど矮小な『卓越した女』の実例か、さもなくばごく一般的な『内助の功』にすぎないから」(99)である。歴史上女性が受けてきた抑圧を考慮すれば、女性のうちに男性に勝る業績を上げる人物が出るはずがない。また、あくまで抑圧の結果によってそれ以外の道が閉ざされていたがための「内助の功」を評価し、女性の家庭での役割を賞賛することは、「男にとってまことに都合のよ」いことであり、「その点である種の女性史家は完全に自己の墓穴を掘っている」という。さらに村上は、抑圧された歴史しか持たない女性は、歴史上いまだ真の姿を現していないと考えていた。

> 女性史はある特殊な歴史条件の影響を受けた人間の生活を明らかにするのであるから、これで女を理解することはできない。むしろ女の本質からどれだけ遠ざかっていたかを理解することができる。歴史的な女というものが、いかに巨大な圧力を受け、歪められ、変形され、本源の姿から別のものにつくりかえられたかを測定するために、この特殊研究は役に立つ。(100)

「卓越した女」も「内助の功」も、あくまで変形した女性たちの姿にほかならない。巨大な圧力の下に生きていた女性たちは本来の女ではなく、女性史はむしろ過去の女性がどれだけ「女の本質」から遠ざかっていたのかを理解するためのものである。このような彼の初発の立ち位置が、これまで捨象されてきた大多数の一般市民のリアルな姿を明らかにしようとする社会史や民衆史とは大きく異なるものであることが理解されよう。

では、村上の言う、本来の女、真の女とはどのような存在か。真の女は抑圧社会である過去には存在しない。現在に萌芽がみられ、そして来るべき未来に現れるその女こそ、「ズボンを穿いた女」なのである。

一〇代でマルクスに親しみ、それまで傾倒したアナーキズムから距離を取っていた村上にとって、キモノ・スカート、ズボンは、単なる女性の服装のバリエーションとして並列に存在しているものではなく、発展段階的に存在するものであった[*15]。彼は『服装の歴史』シリーズの中で、服装の変化は社会的条件に支配されることを強調し、明治以降から戦後にかけてのキモノからスカートへの服装の変化を、封建的社会秩序の崩壊と女性の経済的地位の向上と関連づけて説明する。

村上は、「二本の脚を一枚の布で包むより別々に包んだほうが合理的だということは子供でものみこめる」[*16]と、不自由で非活動的なキモノ・スカートからズボンへの変化は、合理的必然であり不可逆な変化だと位置づける。この考えは論争のなかの吾妻のテクストにも示されている。

> 女がズボンを穿いたのは流行からではないからだ。また氏が独断しているようなマゾヒズムともなんら関係がないからだ。[…]重要なのは女が経済的地位を高めるにつれて「合理的な服装」を採用するようになったことだ。だから、衣服としての根本問題は、貞淑・羞恥・謙遜、女らしさの、一切の道徳的象徴と化したスカートから、別個に動く二本の脚を別個に包む機能的形態に進んだという点にある。(④:150)

キモノ・スカートからズボンへの変化が合理的な変化、発展であり、不可逆である以上、真の女性、新しい女性は必ずズボンを穿いていなければならなかった。村上のテクストには下記のような一文がある。

> おそらく、真にあたらしい女は次のような姿をとるであろう。第一に、彼女は見た眼には完全な女である。もし彼女が美しかったとしたら、非常に女らしくさえみえたかもしれない。[…]ただその眼がもっと大胆に人を見、そのものごしがもっと活発であり、その声がもっと自信を帯びてひびくだけである。ただその服装がズボン形式の実用的なものであり、衣服によって男の眼をひこうとしないだけである。(220、傍点引用者)

「真にあたらしい女」は、男性の模倣としてズボンを穿く女ではない。「非常に女らしくさえみえた」と記しているのは、女性のズボン着用がそれ以前にはしばしば単なる「男装」とみなされ、女性の男性化として揶揄されたためである。キモノやスカートに代表される「女らしさ」はあくまで男性本位

*13 彼の『明治女性史』が一九五〇年代、まさに吾妻新として活動していた時期に構想されたものである点は拙稿(2016)にて論じた。

*14 村上(1947:99)。以下、本節の引用は断らない限りすべて同書により、頁数のみを記す。

*15 旧制中学から早稲田第一高等学院入学頃までの村上の思想に関しては、彼の自叙伝的小説『黒助の日記』全三巻(偕成社、一九七七年)に詳しい。

*16 同様の主張は吾妻新「女のズボンについて」にも見える。「男と同じ二本の足をもち、おなじように交互に動かして歩くものを、別々に包まず一枚の布でくるむことはバカげた話」(②:133)。

のものであり、これらの抑圧から解放された新しい女は、ズボンを選びとった時に初めて真の女らしさが顕現する。これこそが吾妻＝村上をして、ズボンへの強烈な執着を抱かしめた理由なのである。

2　流行と風俗化

吾妻＝村上のズボンへの執着は以上のように理解できるが、なぜそれがスラックスの語の使用をかたくなに否定することにつながるのかという点は明らかではない。本節では吾妻＝村上が強調した流行と風俗の違いに着目してこの点を検討する。

前述の通り、ズボンを穿いた女性は、吾妻＝村上の待望する真に新しい女であり、彼の理想とする女性解放、男女平等の象徴に他ならなかった。そしてズボンの女性への普及は、その前提条件として、女性の地位向上、人々の意識の変化といった歴史的条件が整うことでもあった。そこで吾妻＝村上がこだわるのが、流行と風俗の違いである。

村上は、著作『女について』や『服装の歴史 三』において、流行と風俗をはっきりと区別している。流行とは、例えば鹿鳴館時代における洋装ブームのように、一部の人々に限られ、社会に根付くことなく終わってしまうものである。吾妻＝村上に言わせれば、それはその流行が民衆の生活から乖離していたからであり、同時に、広く定着し「風俗」となるための歴史的条件が整っていないために起こる。例えば明治期に男性の洋装が軍服から一般化し風俗化したのに対し、女性の洋装は単発的な流行にとどまり戦後になるまで風俗化しなかったことなどがそれである。彼は、これは女性にのみ歴史的前提条件が整っていなかったために起こったことであり、女性は「機能的な、快適な、理想的なズボン形式をとることを許されなかった」と位置づける（村上 1956）。

ズボン・スラックス論争において沼・吾妻双方が認めているように、スラックスは、本来アメリカで流行していた女性用ズボンの呼称である。吾妻＝村上は『服装の歴史 三』において、「ズボンが日本で風俗化する基礎はアメリカのズボンのまねだけでは成り立たない」（村上 1956: 2）として、「アメリカのズボン」＝スラックスと、日本女性に定着し始めたズボンをはっきりと区別し、前者に流行、後者に風俗化をみている。[*17] 合理的で当然選ばれるべきズボンが民衆女性の生活に根づき、風俗となった時、はじめて女性は「慣習よりも合理性に基づいて行動できるようになった」と評価できる（村上 1947: 25）。吾妻＝村上はこのように、スラックスとズボンに大きな違いを見出していた。

論争において、沼はスラックスの語が巷間ばかりか専門家の間でも定着していることを示すため、当時のファッション雑誌の記載やデザイナーの意見を引き合いにだした（③）。④の応答において吾妻はそれを全否定したため「専門家の色

眼鏡」と揶揄されることになるのだが、全否定の理由は彼のこのような思想から明らかになる。吾妻＝村上にとって、女性がズボンを穿くようになったことは、服飾の問題ではなく社会発展の問題であり、服飾デザイナーはその点で専門家ではないからである。[*18] スラックスの語を採用することは、現在日本で風俗化しつつあるズボンを流行に帰すこと、そして、男女平等の象徴であるはずのズボンに再び男女の差異を設けることでもあった。当時スラックスがズボン一般ではなく「女性用ズボン」を示す用語であったことに注意したい。村上は『服装の歴史 三』において以下のように述べている。

> 女の風俗としてズボンがみとめられるようになったということは、もうズボンが男のものではなくなったこと、どちらの性でもなくただすべての人間にとって自由な便利な服装になったこと、服装を支配してきた歴史的歪みが取り除かれた時期に達したことをものがたっている。それが今日のズボンだ。そこにまた女らしさを持ちこもうとするのはナンセンスでしかない。（村上 1956: 287）

女性におけるズボンの風俗化は、男はズボン、女はキモノ・スカートという歴史的な歪みが取り除かれたことを示し、男女平等社会の到来を告げる先触れであった。吾妻＝村上にとって女性のズボンとは、真の女性解放のための欠くべからざるアイテムであり、未来永劫に定着すべき風俗であり、決して一過性の流行と認めることはできなかったのである。さらに吾妻＝村上は、「民衆の生活に根をおろ」したものへの関心を常に持ち続けていた。これは『明治女性史』における主張にもあらわれている。この関心は服装研究においては、「生活に密着した衣服」への関心として現れる。吾妻は「だからズボンにしても、節目の通ったおしゃれズボンには魅力をかんじない。むしろバスの車掌の制服などに惹かれる。それは女車掌のはたらく生活と結びついて、生き生きとした、フレッシュな美を感じさせる。女工さんの場合もそうだ」（吾妻 1955: 141）、「しかし、一般に女のズボンが問題にされるのはこうした生活のなかの服装ではなくて、新聞や雑誌にはなばなしく書き立てられ、一部のものが身につけて歩いている流行のズボンである」（村上 1956: 281）、「風俗としてのズボンは、職場と家庭生活にみることができる」（同前: 279）等々述べ、常に民衆生活を意識して風俗化を考えていたことがわかる（以上、傍点引用者）。

以上が、スラックスの語に強硬に異議を唱えた吾妻＝村上

＊17　この主張そのものがズボン・スラックス論争からの着想である可能性もある。

＊18　村上はこのため、自身の服装史研究を決して服飾史とは呼ばなかった。

の思想的背景である。一見ささいな論争であるズボン・スラックス論争は、村上信彦の思想を理解するにあたって、実に重要な示唆を与えてくれるのである。

3　男女平等時代のサディズムとズボンの性的活用

1　サディズムの「馴致」と風俗化

これほどまでにズボンに託した女性解放を求めていた吾妻＝村上が、実は妻をさいなむサディストであったという事実は一般的に見れば奇妙である。村上は婦人解放論を唱えた植木枝盛について論じた際、植木が私生活では常習的に女郎買いを行っていたことなどを根拠に辛辣な評価を下し、それがもとで植木研究者の外崎光広との間で論争を起こしている（外崎 1972a, 1972b, 1975, 村上 1974）。そのやりとりの中では、「女郎買常習者の婦人解放論や廃娼論は無価値」とまで述べている（村上 1974）。しかし吾妻＝村上は、自身のサディズムと女性論とを矛盾するものとはとらえていなかった。彼の実践したサディズムは、彼いわく「近代化されたサディズム」であり、それは日常における完璧な男女平等のもとに築かれる、寝室に限定された加虐・被虐関係であったからである。以下、旧稿と重複する部分もあるが（河原 2015, 2016）、議論の前提として重要であるので、吾妻＝村上の唱えた新しいサディズム論について概観する。

彼は『奇譚クラブ』において、サディズムの語源であるフランスのサド侯爵に代表される、双方の合意なく、身体を過度に傷つけるような加虐の実践は、古いサディズムであり、真のサディズムではないと主張した。サド的なサディズムでは、惨酷さ＝肉体的苦痛がその中心となるため、サディストは「加害者」であり、マゾヒストは「被害者」であるのが常であった。吾妻＝村上はこの図式を批判し、対等かつ信頼関係にある男女の寝室にサディズムを限定し、身体的苦痛より精神的汚辱を重視することによって、これを遊戯として「馴致」することを提唱した。吾妻＝村上はこれを「近代化されたサディズム」と呼び、新しいサディズム、真のサディズムだと主張した。

> これが古い型とちがう点は、第一に、肉体的苦痛より精神的苦痛をあたえることです。拷問ではなく折檻であり、惨酷ではなくて凌辱することです、第二に、暴力で相手を屈伏させるのでなく、啓蒙し、教育し、そのよろこびに参加させることです。第三に、刹那的衝動的ではなく、日常生活のなかに採り入れて永続させるように計劃を立て、あらゆる準備をととのえることです。（吾妻 1953: 21）

拷問と折檻、惨酷と凌辱の違いは理解しにくいが、物理的な肉体への攻撃ではなく、心理的な凌辱感、羞恥を与えることを重視する立場と理解して差し支えない。[*19] 相手を「啓蒙し、教育し、そのよろこびに参加させること」が特徴として挙げられているように、近代化されたサディズムは、信頼・愛情のある人間同士で快楽を共有するものであった。そのため「苦痛よりも苦痛にみえること」が重視され、「犠牲者の意識を単純な苦痛で濁らせる」ことは愚かしい行為とされる（同前：22-23）。明治時代以降、サディズムの中心を占めていた肉体的苦痛は退けられる。

さらに、吾妻＝村上によれば、新しいサディズムもまたズボンと同じく、歴史的条件が整うことによって発現するものである。

> ハッキリ言いたいのは、この無害なサディズムが特殊な地点に突然出現したのではなく、いわゆるサディズムと称する反社会的衝動の昇華として、近代化されたタイプとして、徐々にその中から抜け出てきたことです。（吾妻 1954a: 68）

精神的汚辱を重視するサディズムは、女性がズボンを穿くようになったことと同様に、近代化によって出現してきたものである。村上はこの新しいサディズムが世界的に起こりつつあることを指摘しつつ、なかでも日本のサディズムが最も進んでいると主張した。彼はこのサディズムを日本型サディズムとも呼んだ。

さらに吾妻＝村上は、このサディズムを「刹那的衝動的でなく、日常生活のなかに採り入れて永続させる」、つまり風俗として定着させることが必要だと説く。サディズムの近代化が、服装の近代化＝ズボンの風俗化と同じ論理で語られていることが明瞭に見てとれる。

これに加え、吾妻＝村上は性行為の一部分、この場合は緊縛や猿轡（さるぐつわ）という要素のみを取り出してこれを暴力とみなす見方を批判する。これらはあくまで性行為の一部分であり、文脈次第で快楽にも苦痛にもなり得る。彼はそのためサディズムを寝室に限定し、信頼関係のあるパートナーと愛情行為に落とし込むことで、これらを苦痛から切り離す。サド的なサディズムは「原始的本能」として存在を認めるものの、サディズムが存続できるのはこのような場合のみであり、彼はこれを「サディズムを馴致する」と呼んだ。

このように、吾妻＝村上が肯定し、実践したサディズムは、愛情行為と直結した自由な前戯のバリエーションであり、

＊19　村上は、女性論においても肉体的苦痛と精神的苦痛を明確に区別していた。詳細は河原（2016）。

「征服の快感」ではなく「愛情の快感」によって充足するものであり、彼の女性論と矛盾するどころか、完全に同じ思想に立脚するものであった。繰り返すが、このサディズムにおいては、男女の平等関係が前提として不可欠である。男性優位はもちろんのこと、女性優位も認められない。ズボン・スラックス論争において彼が、女のズボンを喜ぶのはマゾヒスティックという考えが「危険」とまで言い切ったのはこのためであり、これが彼の提唱した男女平等時代のサディズムであった。

2　ズボンの性的活用――裏返しの拘束衣

吾妻＝村上にとって、女性のズボンと新しいサディズムは、ともに男女平等社会の必須要件であった。さすれば彼にとって、両者はいかに関連するのであろうか。

彼は『奇譚クラブ』において一貫してズボンを性的に活用し、連載小説などでズボンを穿いた魅力的な女性との間における新しいサディズムの実践を描いた。しかし彼は自身のサディズムとズボンの関係性をきっぱりと否定する。

> 私が女のズボンに魅力をかんずるのはなぜだろうか？
> これは私のサディズムとなんら関係がないので、純粋な服装の問題となつてしまいます。つまり、女のズボンはキモノやスカートに比して、ずつとあたらしい美を表現しているからです。（②：134）

ズボンはサディズムを喚起するものではない。彼がズボンに欲望を喚起されるのは、あくまでズボンが新しい美を表現しているからである。では、この新しい美とは何か。

> 服装の魅力が永久不変のものでなく、時代と共に変化すること、その変化は着ている人間の内容とかたくむすびついていることを知るべきです。キモノはいまの女も着ますが、キモノ本来の美を最も発揮するのは封建時代の奴隷道徳で養われた女が着た場合で、それは忍従や弱さや脆さと内面的に結びついて完全な魅力となります。（②：135）

服装に感ずる魅力とは常に着ている人間の主体と関わっている。キモノの美とは、忍従や弱さ、すなわち抑圧された女としての美である。彼は同誌一九五四年六月号に掲載された「海外サディズム雑記(3)」において、女の不自然な服装のほとんどは男の欲望が作り出したものだと指摘する。タイトスカートやコルセット、ハイヒールといった海外の女性風俗はその例であり、これらは女性を屈伏させる「古い」サディズムを満たす小道具として利用されてきたという。

これに対し、ズボンの美とは近代化した自律的な女の美で

ある。吾妻＝村上は、女性が解放され自由に服装を選べるようになったあかつきには、機能的なズボンが選び取られることが合理的必然であると考えていた。そのため、新しい美とは、第一義的には合理性に基づいた「機能美」と「形態美」に求められる。そして、「原則的に云えば、日本髪にキモノを着て帯を高々としめあげた姿を愛するのは、奴隷のごとくかしづく従順な女を愛していること」であり、ズボンを穿いた女を愛することは、「従順一点張の女よりも個性のあるいきいきとした女」を愛することである（②：135）。ズボンの魅力とは、これまでの男性本位に構築された女らしさから解き放たれた、真の女らしさを表すものであり、だからこそ新しい美なのである。

したがって、この新しい美はサディズムと直接関係しない。彼にしてみれば、抑圧の表出であるキモノやスカートがサディスティックな欲望を喚起することはあっても、解放の象徴であるズボンが喚起することはあるはずがないからである。吾妻＝村上がズボンを熱烈に愛好しながらも、自身のサディズムとの結びつきをあくまで否定したのは、このような理由による。

そのうえで、吾妻＝村上がサディズムにズボンを利用することを推奨したのはなぜであろうか。彼の提唱した新しいサディズムは、「苦痛そのものではなく苦痛にみえること」、すなわち直接的な肉体的苦痛よりも精神的汚辱を重視するものであった。吾妻＝村上は、ズボンの上からであれば、緊縛や鞭打ちを行ったとしてもまず傷害の恐れがないこと、布地が肌に密着していることにより常に拘束感を与えることができることなどを理由に、ズボンのサディズムにおける機能性を説く。新しい魅力であるズボンの「機能美」が、新しいサディズムの遊戯においても発揮されるのである。彼はまた以下のようにも語る。

> 女のズボンをサディズムの色眼鏡で見る場合、第一に拘束という性質が意識されてきます、だから私は半ズボンや七分ズボンを好みません。かならず足首まで達する長さでなければなりません。（吾妻 1954b: 53）

本記事はズボン・スラックス論争の約一年後に掲載されたものであり、吾妻の態度はやや軟化し「サディズムの色眼鏡」でズボンを見ることを許容している。そしてその場合、ズボンの拘束性が第一に意識されるという。さらに別箇所では、裸体ではなくズボンの上から緊縛する場合、布地のたるみによって「どんな他の服よりも裸体よりもこの緊縛効果がズボンによって最高度に発揮されていると感ずる」（同前：56）とも述べている。

一方ではズボンの自由さ、活動性を強調しておきながら、一方ではズボンに拘束性という「機能美」をみる彼の主張を

そのまま了解することは困難である。しかし興味深いことに、彼はこの矛盾にこそ欲望を喚起されていたようである。彼は「自由且つ開放的、活動的で合理的な服装が、こゝでは肉感的な拘束衣として扱われ」る（同前：52）、というように、しばしばズボンを自由な服装であり、かつ拘束衣であるという対比で語る。「本来はもっとも自由である服装が、裏返しされてサディズムに利用」（②：137）できるということ、結論から言えばこの倒錯こそが、吾妻＝村上のズボンへの強烈な欲望の源だったのではなかろうか。

拘束性を持つ服装は、彼が自ら指摘しているように、タイトスカートやハイヒール、コルセットなど、様々に存在する。しかし、これらは日常においても女性を拘束する抑圧の象徴であり、その背後にいる抑圧された女性たちの存在を忘れることはできない。次節で述べるが、吾妻＝村上は社会・経済的に制度化された抑圧構造を激しく憎んでいた。何に快楽を見出すかは寝室においては個人の自由であると認めつつも、彼は既存の権力関係を寝室で再生産することにはためらいを覚えていた。

ところが女性のズボンは、既存のあらゆる抑圧から解き放たれたものである。ズボンがハイヒールやコルセットなどと明確に異なる理由はここにある。彼にとって、既存の権力関係を模倣しないやり方で、加虐・被虐関係を楽しむことを可能にする唯一のものが、ズボンなのである。ズボンの拘束性は、ズボンが本来自由な服装であるという前提によって何倍も魅力的になるのであり、これこそが吾妻＝村上がズボンに魅了された理由といえよう。

このような論理のもとズボンをサディズムに用いた場合、そこに立ち現れるのは、論理的には旧時代の抑圧とは無縁の、純粋に性的な加虐・被虐の遊戯である。吾妻＝村上は、この新しい地平を目指そうとしたのではなかろうか。彼が否定しようとしたズボンとサディズムの結びつきこそが、彼の新しいサディズムの支柱であったのである。

吾妻＝村上のサディズム論は、現代の我々から見れば男性本位かつ利己的に映る点も少なくはなく、全面的に賛同することはできない。しかしそれを差し引いても、彼の主張は当事者の切実な主張として、そしてそれを理論化したものとして十分に意義がある。

3　吾妻のサディズム、沼のマゾヒズム

最後に、吾妻新と沼正三の共通点、相違点について述べたい。沼は、自身の従軍体験に端を発する「白人」崇拝をベースに、「人種」差別・階級差別と社会的抑圧構造にこそ快楽を見出したマゾヒストであった。これに対し、吾妻＝村上は女性への抑圧構造に異を唱え、生涯これと闘った思想家であった。両者が相いれなかったことは必然であるかのようにも思える。しかし前述のように、吾妻＝村上は、キモノやハ

イヒールなどの抑圧的服装からサディズムが生起すること、すなわち抑圧構造から快楽が生み出されること自体は肯定する。そして、女性の抑圧を許さない男女平等主義者においても、このような抑圧の快楽への誘惑が断ちきれないことを、身をもって知っていた。この点において吾妻＝村上と沼は共通する。

二人の相違は、性的に活用する抑圧構造の性質にあった。沼の「家畜人ヤプー」は、「白人」によって「黄色人」である日本人が人間ではなく類人猿・ヤプーとして家畜化され、徹底的に管理・消費される架空世界を描いたものである。本作品においては、差別・抑圧は完璧に社会制度化され、ヤプーは様々なやり方でモノ化され消費されていく。

対して、吾妻＝村上は社会・経済的に制度化された抑圧構造を激しく憎み、これを快楽に転ずることを拒んでいた。その制度化された抑圧構造とは、具体的には刑罰・拷問、公娼、女工の酷使などである。吾妻＝村上は、趣味においてはどのような抑圧を用いても構わないとしつつも、自身ではこのような「個人の性生活をはなれた、社会制度や経済組織の犠牲者をみて絶対に快楽を感ずるわけにはいかない」と述べ、その理由を以下のように説明する。

> どんな個人の残酷さよりも権力の残酷さのほうが罪悪だと信ずるし、両者を混同するのは性質の上からも誤りだと思うからだ。もちろん趣味の上ではどんな現象を取り上げてもかまわないが、それをジャスチファイすることだけは慎みたいというのが私の考えである。（吾妻1956：23）

吾妻＝村上は、個人が私的に行う残虐行為と、権力によって制度化された残虐行為を区別していた。この区別は彼が提唱した日常と寝室との区別と、完全ではないが一致するだろう。そして後者を性的に活用することはかまわないが、それを正当化することは戒める。たとえ男女が逆転したファンタジーにおいても、沼のような人間のモノ化は吾妻の認めるところではなかっただろう。

さて、論争における沼のテクスト①はその後、一九七〇年に刊行された『ある夢想家の手帖から1』に改稿のうえ収録されているが、そこで沼は章題を「スラックス」から「女のズボン」に改めている[*20]（沼1970：218）。そして村上の著作『女について』から、「どんな理由からにせよ、女がズボンを穿いたということは大きな革命だった」という一文を引用し、「さしあたっては、『唯』男女同権の象徴にすぎぬ女のズボン

＊20　なお、「ある夢想家の手帖から」の刊本はこのほかに、『奇譚クラブ』連載時のものをほぼそのままの形で収録した潮出版社版（全六巻、一九七五・七六年）、太田出版版（上下巻、一九九八年）がある。

姿も、来るべき女性支配国家を（…）夢みさせてくれるのである」（同前：234、傍点原文）と述べている。このように本書は、旧稿のスラックス表記をズボンに改めたうえで、ズボンが女性上位ではなく男女同権の象徴であるという吾妻＝村上の見解に従った書き方に改められていると理解できる。スラックスの語に関しては、一九七〇年段階での意味の変化を考慮し、読者の便宜を図って改めたとも解釈できるが、わざわざ「男女同権」と「女性支配」に強調点を付す書きぶりなどは、穿った見方をすれば、読者として吾妻＝村上を意識した書き方とも受け取り得る。

想像を逞しくするならば、沼は論争の後、ある段階で吾妻が村上であることに気づいたのではなかろうか。それはひょっとすると、論争の翌々年に出版された村上の『服装の歴史 一』を読んだ時ではないか。実際に沼は『ある夢想家の手帖から1』[*21]において『服装の歴史』シリーズを読んだことを記している。

そのうえで、沼は「まことに、私どもにとって『女がズボンを穿いたということは大きな福音であった』」と、村上の一文に「私どもにとって」という一語を付して、さらに「革命」を「福音」と改めこのエッセイを締めくくる。「歴史的見地から」（同前：235）ズボンの意義は、吾妻＝村上に従うとしても、あくまでマゾヒストとして、女のズボンに女性上位世界の夢を見ることはやめない、という態度がここに示されているようにも思われる。

おわりに

一九五〇年代前半の『奇譚クラブ』においては、読者間で議論が戦わされることがまれではなく、ズボン・スラックス論争もその一つと位置づけられる。しかし、例えば同年、伊藤晴雨と黒井珍平の間で起こった日本髪をめぐる論争が、多くの読者を巻き込んで誌面を賑わせたのに対し、本論争は特に話題になった形跡がない。『奇譚クラブ』という稀な雑誌の読者をもってしても、吾妻と沼、特に吾妻の服装論は異質であったことを示すものだろう。特に、彼のズボンに対する思い入れに共感する読者は後にもほとんど現れなかった。

しかし、この奇妙な思想家のサディズム論自体は、当時の『奇譚クラブ』誌上において歓迎され、定着していった。しばしば猟奇犯罪者と同類視され、一方的に異常者のレッテルを貼られてきた当時のサディスト／マゾヒストたちにとって彼の理論は非常に魅力的であったからである。[*22]これ以後徐々に、アブノーマルな性の実践に対する批判をかわす論理として、信頼関係や愛情行為という言説が反復されるようになる。

冒頭で述べた、現代日本のSM文化の特徴は、信頼・愛情関係の重視であった。これが吾妻＝村上のサディズム論と非常によく似ていることは首肯されよう。吾妻が「近代化されたサディズム」の要件とした信頼関係や精神性、そして愛情

行為への接続は、自己正当化の理論として当事者の間で成熟し、現代日本のSM文化においても重要な役割を果たしているとみることができる。筆者はしたがって吾妻のサディズム論に日本的SMの萌芽を見ることができると考える。

ところで、一九八〇年代、レズビアン・フェミニストを中心にサディズム／マゾヒズムの是非を問う論争がアメリカで起こった。サディズム／マゾヒズム否定派は、サディズム／マゾヒズムは日常における不平等関係の反映であり、これを助長するものであるとしてこれを厳しく批判した。肯定派は、サディズム／マゾヒズムは日常の権力関係そのものではなくこれをパロディ化するものであり、既存の秩序を攪乱するものだと反論した。[*23]

坂井はまなは、しかしながら日本においてはこのようなサディズム／マゾヒズムの暴力性が問題視されることがなく、ジェンダー不均衡性が不可視化されてきたと指摘する（坂井2009）。その原因の一つに、信頼関係や精神性の重視により、行為自体が暴力というより愛情の確認行為とみなされてきたことを挙げている。吾妻＝村上が提唱した男女平等時代のサディズムの要件は、現代においては皮肉にも逆に男女の支配・被支配関係を不可視化する役割を果たしているのである。

日合あかねは、男性の場合、性的にマゾヒストであっても日常においては「権力者」であるというように、個人の性的領域と日常的領域が対立することがしばしば容認されるのに対し、女性の場合は両領域が常に連続したものとしてとらえられてきたことを指摘する（日合2005）。吾妻＝村上は、サディズムを寝室＝性的領域に限定し、日常的領域と分離させるべきことを強調した人物であった。前記の吾妻＝村上理論の転倒的受容は、この分離の意義が捨象された点に原因を求めることができそうである。

吾妻の主張は、この他の点でも転倒的に受容されている。

＊21　『服装の歴史』シリーズには、吾妻＝村上が『奇譚クラブ』に発表したものと重複する内容・事例紹介・言い回しが多数含まれており、両者を読み比べれば同一人物だと気づく可能性は非常に高い。筆者もまた、本書を読んだことで吾妻と村上が同一人物であることを確信した一人である。

＊22　当時の『奇譚クラブ』には、吾妻に賛意を示し、称賛する投稿が相次いだ。数例掲げる。

「吾妻新氏の〈サディズムの精髄〉なる一文はまことに立派な論文であり明解にして堂々たる主張で［…］特に近代のサディズムの本質は女性を肉体的に苦めるよりも、より多く精神的な苦痛を与えることなりという点は全然同感です」（「読者通信」一九五三年四月号、六四頁）、「そして異性を愛したい心（サディズム）となり愛されたい心（マゾヒズム）となるので、行為は要はどのようにして愛するか、その方法によるのだと思うのです」（水上流太郎「私は訴える――アブ放譚――」（一九五六年四月号、七一頁）。

＊23　否定派の論考として、Rinden（1982）、肯定派の論考として、Califia（1994）が挙げられる。

吾妻のサディズム論を継承した以後のサディスト／ドマゾヒストたちは、自己を正当化する際、しばしばサド的な「古い」サディストをサディズムの範囲から排除した。「彼らは真のサディストではない。憎むべき異常者である」として。

しかし、吾妻の主張は、本来サド的なサディズムを持て余す潜在的猟奇犯罪者にむけられていた。吾妻は彼らを異常者と切り捨てることをせず、彼らの苦しみに共感し、これを解決する方法として、真剣に「サディズムの馴致」を説いたのである。吾妻はサディストと振る舞ってなお、村上と同じく抑圧された人々のために戦う思想家だったのである。その主張への疑義を差し引いても、この功績は評価されるに値する。

吾妻新のサディズム論と現代の状況の関係をより明確に論ずるには、六〇年代以降のＳＭ文化の展開を実証的に明らかにする作業が必要だが、これらは今後の課題としたい。

参考文献

吾妻新（1953）「サディズムの精髄」『奇譚クラブ』一九五三年三月号
――（1954a）「さるぐつわ」『奇譚クラブ』一九五四年四月号
――（1954b）「海外サディズム雑記」『奇譚クラブ』一九五四年八月号
――（1955）「きいたふう」『奇譚クラブ』一九五五年五月号
――（1956）「明治年間の新聞覚え書」『奇譚クラブ』一九五六年四月号
飯田豊一（2013）『「奇譚クラブ」から『裏窓』へ』論創社
上野千鶴子（2002）『差異の政治学』岩波書店
河原梓水（2015）「病から遊戯へ ―― 吾妻新の新しいサディズム論」、井上章一・三橋順子編『性欲の研究 ―― 東京のエロ地理篇』平凡社
――（2016）「村上信彦の『奇譚クラブ』における匿名テクストを解読する ―― 戦後の民主的平等論者の分身について」『立命館文学』六四七
北原童夢・早乙女宏美（2013）『「奇譚クラブ」の人々』河出書房新社
古庄ゆき子編（1987）『資料 女性史論争』ドメス出版
斎藤光（1999）「Psychopathia Sexualis の邦訳について ―― 邦訳は原著第何版か？」『京都精華大学研究紀要』一七
――（2006）「解説」『近代日本のセクシュアリティ 第二巻 変態性欲と近代社会 一』ゆまに書房
坂井はまな（2009）「海外ＢＤＳＭ界における〈日本〉イメージ ―― 快楽の活用とジェンダー」、川村邦光編『セクシュアリティの表象と身体』臨川書店
外崎光広（1972a）「村上信彦著『明治女性史』」『歴史評論』二七六
――（1972b）「植木枝盛の婦人論をめぐる村上信彦・富田信男・熊谷開作氏の所論批判」『高知短期大学社会科学論集』二五
――（1975）「植木枝盛の婦人論について 村上信彦氏の反論に答える」『社会科学論集』二九
内藤三津子（2013）『薔薇十字社とその軌跡』論創社
中山千代（2010）『日本婦人洋装史 新装版』吉川弘文館
濡木痴夢男（2004）『奇譚クラブの絵師たち』河出書房新社
――（2006）『奇譚クラブとその周辺』河出書房新社
日合あかね（2005）「『女性のマゾヒズム』再考 ―― アメリカにおけるＳＭ論争を中心に」『女性学年報』二七
沼正三（1970）『ある夢想家の手帖から1』都市出版社
村上信彦（1947）『女について 反女性論的考察』興風館（＝（1997）『こぶし文庫 女について』こぶし書房）
――（1955）『服装の歴史 一 キモノが生れるまで』理論社
――（1956）『服装の歴史 三 ズボンとスカート』理論社

――（1969-1972）『明治女性史』全四巻、理論社
――（1970）「女性史研究の課題と展望」『思想』五四九
――（1972）「女性史研究の性格と方法について ―― 伊藤康子の批判に関連して」『歴史学研究』三八〇
――（1974）『明治女性史』批判への小論 ―― 主として植木枝盛論」『歴史評論』二九四
Binet, Alfred (1887) Le fétichisme dans l'amour", *Revue Philosophique* 24.
Califa, Pat (1994) *Public Sex: The Culture of Radical Sex*, California: Cleis Press.
（＝（1998）東玲子訳『パブリック・セックス ―― 挑発するラディカルな性』青土社）
Linden, Robin Roth et als (1982) *Against Sadomasochism: A Radical Feminist Analysis*, California: Frog in the Well.
Stefanowsky, Dimitry (1892) Le Pasivisme Archives de l'Anthropologie criminelle, *Archives de l'Anthropologie criminelle* 7.

The Dispute about Zubon and Slacks between Shin Azuma and Syozo Numa: The Origin of Japanese Sadism in the Kitan Club Magazine in 1950s.

Azumi Kawahara

In 1953, the dispute occurred between the sadist Shin Azuma and the masochist Syozo Numa in a sex culture magazine Kitan Club. The point was whether trousers women wear should be called slacks or zubon. Azuma argued that it must be named not slacks but zubon.
Azuma's real identity is Nobuhiko Murakami who was historian of fashion and women's history. He recommended that women wear trousers as a symbol of sexual equality. He rigidly denied the word of 'slacks' because it was a name of trouser recently imported from America. He regarded women's wearing trouser as to be firmly established in the society, not as temporary fashion, and considered it to be foreshadowing to tell the arrival of the society with gender equality.
Murakami then proposed the new Japanese sadism. This sadism relies for abusive pleasure much on mental pain, not physical pain, and referred it to the sadism that was modernized. The zubon as a symbol of the women's liberation was defined as the only tool that realized pure sexually abusive relations without imitating existing extra-power relations outside of private spheres.